

平成 20 年度スタンフォード大学研修報告書

熊本大学医学部附属病院 下之坊 俊明

1. 研修に参加した目的と成果

今回、1 週間の研修に参加させていただき、短い期間ではありましたが、自分にとってかけがえの無い経験ができたと思っています。本研修に参加した目的は、世界でも最先端の技術を持つ機関での研究や臨床技術を自分の目で見て、自分の研究や臨床に対する考え方を見直すことにありました。また、私は日本ではまだ馴染みの薄い Molecular Imaging についても興味を持っており、その研究が進んでいるスタンフォード大学の現状を知りたいというのも今回の研修に参加したもう一つの目的でありました。結果として、スタンフォード大学における最先端の研究内容に触れることができ、自分にとってはそのどれもがエキサイティングな内容ばかりでした。研究に対する考え方、将来の技師としてのあり方について深く考える機会になりました。また、Molecular Imaging については自分の中での認識が大きく変わり、放射線や放射性医薬品、MRI 等従来の技術だけでなく、バイオルミネッセンスという技術を用いた光学イメージングも盛んに行われているのがとても印象的でした。

2. 日本と米国の診療放射線技師の違いをどの様に感じたか

米国の診療放射線技師について学んで最も強く感じたことは、それぞれの分野で技師としての専門性が高いということです。文化の違いもあるかもしれませんが、日本では技師の専門があるといっても業務では一通り全てのモダリティに関わらざるを得ないのが現状であります。米国では放射線技師の国家資格だけでは一般撮影だけしか従事できず、それ以外のモダリティに関わるには更に追加して資格試験があるということに驚きを感じました。これは日本の制度との大きな違いであり、診療放射線技師という職種がひとまとめではなく、各モダリティ専門家として独立して認められていることを示していると思います。日本も将来、同じような方向に進むかもしれないという思いで話を聞きましたが、自分自身もそのような将来を見据えて勉強を重ねていく必要があると感じました。また、スタンフォード大学では、臨床現場の技師と研究者としての技師の立場がはっきり別れているようでした。英語力不足で詳しく伺うことができませんでしたが、臨床に従事している技師は研究分野にはほとんど関わっていないようでありました。臨床を行いながら並行して研究も行うことができる日本の診療放射線技師は環境的に恵まれているように感じました。また、Lucas Center の 3D ラボ見学もありましたが、こちらで印象的だったのは、3D 作成のためのマニュアルがよく整備されており、個人間の画像の仕上がりに差が出ないように努めていることでした。また、3D 作成に従事する技師は解剖や医学の知識があり、様々なモダリティの臨床経験がなければいい画像を作成できないという考え方には共感できるものがありました。日本では診療報酬等の問題もあり、3D 専属の技師を設けることは困難であると思われませんが、スタンフォード大学 3D ラボの姿勢には学ぶものが多くあると思いました。

3. 今回の研修で得たことを今後どのように生かしたいか

本研修は自分の臨床や研究に対する視野を広げるいい機会であったと思います。日本の医療制度における問題点等もありますが、過去からの慣習や常識のみに囚われず新しい考えを取り入れられる診療放射線技師になれるよう精進したいと思います。

以上が報告になりますが、一週間のプログラムは本当に素晴らしいもので、日本では決して経験のできない貴重な内容ばかりであったと思います。今後とも意欲のある会員が参加できるよう同様の企画を継続していただければと思います。最後になりますが、今回の研修を企画して下さった日本放射線技術学会、及び関係者の皆様に深く御礼を申し上げます。

(写真は修了証書授与の様子です。Course Director の Michael Moseley 教授と Lucas Center にて)

